「記憶」の無人島・軍艦島－廃鉱の島・長崎県端島－

柴田　弘捷

はじめに

われわれ社研の春季合宿研究会に参加した17名は、他の「観光客」百数十人とともに、3月16日、廃鉱で無人島にとなっている海底炭鉱の島・長崎市高島町端島(通称・軍艦島)[*1]を訪ずれた。

筆者は、80年代末に、端島より遅れてではあるが、やはり炭鉱が閉鎖(86.11.27)となった高島町を訪ね、閉山の後、荒廃しつつある炭住(何棟かの中層のコンクリート造りの集合住宅からなる)とバラバラと落ちている石炭の小片を目の当たりにした。そして高島から軍艦島を眺め、より荒廃、否、むしろ「廃虚」化しているであろう無人の島を、いつか訪れたいと思ったものである。はしなくも今回それが実現した。

端島は、これまで建物の老朽化、荒廃化のため危険な箇所が多く、立ち入りは禁止されていたが、島の南部が見学通路として整備され、09年4月22日から、ボランティアのガイド付きで観光客が上陸でき、通路からに限り、島の遺跡を見学できるようになった(見学通路以外は現在も島内全域が立ち入り禁止)。

高島は、炭鉱は閉山にはなったがそこには炭鉱以外の生活もあり、過疎化が進んでいたとはいえ、「廃墟」は炭住と採炭設備であり、人々の日常生活は残っていた。が、炭鉱だけの島といってよい端島は、1974年に閉山し、以後無人島となり、かつての住居、炭鉱施設は崩壊しつつあり、周囲を約10mの防潮壁で囲まれた「廃墟の島」といってよい姿をさらしていた。

この端島が、電機大学の阿久井喜孝が中心となって、閉山直後から十数年にわたって行われた軍艦島の建築群の調査・研究[*2]によって、大正から昭和に至る集合住宅の遺構として建築・住宅関係の研究者に、また日本の近代化遺産として関心が寄せられ、加えて21世紀初頭からの「廃墟」ブームの中、その一つとして「廃墟ファン」注目されるようになった。そして、「世界遺産」登録の運動[*3]、「観光資源」として観光クルーズの就航もあって「軍艦島」として一躍脚光を浴びることとなった。

09年4月の上陸解禁によって、島への観光上陸はブームとなり、波風の強い日は船が接岸できず年100日程度しか上陸できないと言われていたにも関わらず、上陸解禁1年の本年4月22日までに上陸者は、市の予想を大きく上回り、59,000人に達した[*4](われわれ社研のメンバーもその数に入っている)。

「観光地」としてよみがえるまで一般には忘れられていた無人の島・端島であるが、実は相異なる二つの面でひっそりと生き残っていた。一つは、旧住民の「懐かしい、楽しい端島」としての「思い出」の中で。もう一つは、強制就労させられていた中国・朝鮮人「労務者」たちの「監獄島」「地獄島」としての「恨み」の中に。

島を案内してくれたボランティアは主に島の建造物とそこでの生活を中心に話してくれたが、そのなかで三つのことが印象に残った。一つは、住宅の広さ・設備と配置に見られる住民の階層格差であり、二つは、にもかかわらず島の人たちの一体感が強かった、ということである。他の一つは、観光客の誰かの「朝鮮人、中国人の労働者」についての質問に対するガイドのＡさんの「居たよ、だけどそのことは言わないよ。ひどかったよ、でもそのことは言わないよ」という、苦しそうな答えであった。日本の企業が戦前・戦中に朝鮮、中国の人を強制的に徴用し、炭坑、鉱山その他で劣悪な条件で過酷な労働をさせていたことは周知の事実であり、高島・端島も例外ではなかった。戦後 60 年たった今もＡさんに、それを語ることを躊躇させているものは何なのか。

今回の訪問を機会に、以上の三点に焦点を当て、軍艦島の観光資源・世界遺産の問題を考えてみたい。

1. 端島の出炭量、従業者・家族、人口の推移と住宅施設等

初めに、すでに多くのところで述べられていることであるが、端島の歴史・概略を述べておこう。

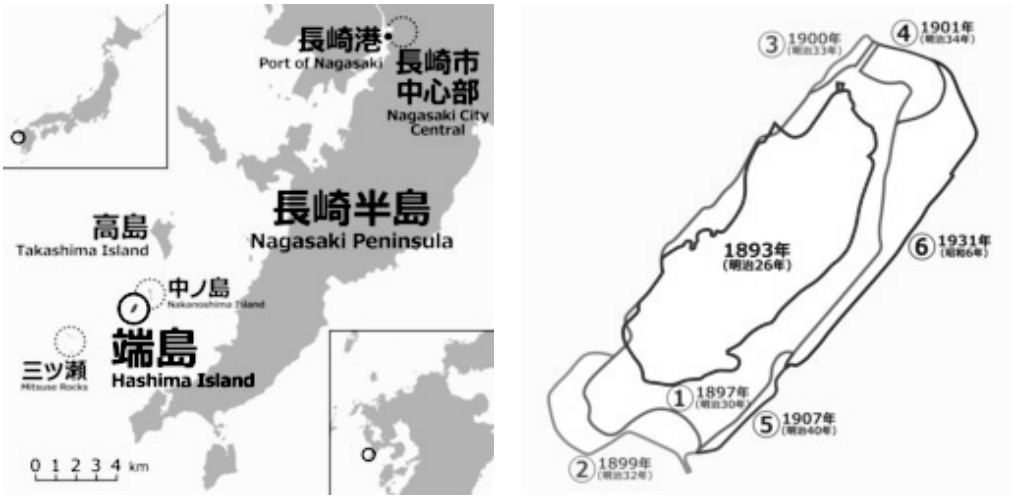
端島は、長崎港の南西の沖約 7.5 ㎞、やはり炭鉱のあった旧高島町の中心であるやはり炭鉱のあった高島から南西約 2.5 ㎞に位置する、南北約 480ｍ、東西約 160 メートル、周囲 1.2 ㎞、高さ約 10ｍのコンクリートの護岸に囲まれた、面積約 6.3ha の小島である(本来、この 1/3 ほどのものでしかなかったが、炭鉱としての整備・拡張のため 6 度にわたって埋め立てられ、現在の大きさになった(図 1 参照)。

出炭量の推移

『軍艦島の遺産』[*5] によると、石炭の発見の時期は定かではないが、江戸時代の終わりには露出炭を採炭する程度であったが、1869 年に長崎の業者が採炭を始め、86 年には 36ｍの竪坑が完成していた。90 年，三菱が 10 万円で買い取り、高島炭鉱の支坑として本格的な開発を進め、97 年には出炭量で高島炭鉱を抜くまでに成長している。

その後、島を埋め立てで大きくし、次々と海底深く坑道を拡大(最深部は海抜 －1,100m)、端

図 1. 端島の位置と埋立・拡大の推移



出所：高島町パンフレット「軍艦島」より転載

島炭鉱は 41 年には約 41.1 万トンを出炭するまでになり、高島炭鉱とともに、主要なエネルギー源として、三菱を、ひいては大日本帝国を支える炭鉱の一つとなっていた。「高島炭鉱(含む端島-柴田)は、当社はもとより三菱全体の飛躍の源泉になったばかりでなく、ひいては近代日本産業の発展に大きく貢献した」と『高島炭礦史』[*6]の巻頭で、三菱鉱業セメント(株)の社長と三菱石炭鉱業(株)の社長が連名で誇らしげ「ごあいさつ」をしている。

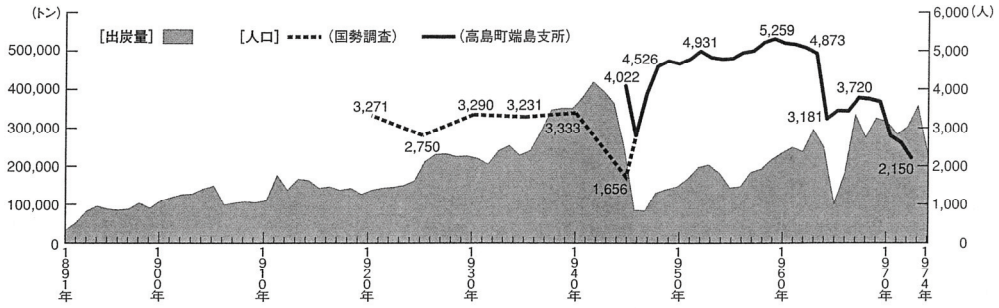
戦後直後は出炭量が 8 万トンに低下したが 47 年から増産が続き、63 年に 24.5 万トンまで増加した。64 年のガス爆発で、約 1 年間採炭休止となり、出炭は 9.8 万トンと大きく減少したが、66 年には 32.8 万トンに回復、その後 30 万トン前後で推移し、閉山 1 年前の 72 年には戦後最多の 35 万トンを記録した(図 2 参照)。しかし、日本経済が石炭から石油へとエネルギー転換が進み多くの炭鉱が閉山していく中、ビルド鉱として生き抜いてきた端島炭鉱は、「炭鉱の閉山旋風中で黒字のまま閉山するのは端島だけだ」[*7]と言われ中、74 年 1 月に「保安上、採掘できるスミはほりつくした」[*8]として 73 年 9 月に閉山が端島労組に提案され、年末に操業を終了し、年間最大出炭量 41.1 万トン(41 年)、最大時 2,000 人超(44 年)の従業員がいた端島炭鉱は、74 年 1 月 10 日その幕を閉じた。83 年間の総出炭量は 1568.7 万トンであった。

この時の離職者は下請を含め 816 名、残務整理、三菱系配転者が 101 名[*9]であった。なお、高島炭鉱はこの 13 年後の 1986 年に閉山している。

人口・端島坑就業者等の推移[*10]

以上のような端島炭鉱の推移は、炭鉱だけの島である端島の従業者、人口の推移に直接的に影響する。1899 年 9 月末の職工数・坑夫数は 1,197 名、1920 年の人口は 3,271 人(国勢調査)。1926 年 1 月の稼働鉱夫数は 1,558 名、その家族 1,133 名との記録がある[*11]。合わせて 2,700 人弱であるが、鉱夫以外の職員やその他の居住者を含めれば端島居住人口は 3000 人程度あったと思われる。36 年 4 月のデータでは、戸数 568 戸、(職員 93 戸、坑夫 460 戸、その他商店など 15 戸)、坑夫 1,397 人、その家族 1,288 人、人口 3,231 人[*12]と記されている。35 年 3 月の人口は 3,136 人、炭鉱就業者は 1,240 人である。37 年 8 月末の炭鉱関連人口は、3,158 人(職員 99 人、その家族 304 人、坑内夫 987 人、坑外夫 512 人、坑夫家族 1,256 人)であった。そして敗戦時(45 年 8 月)の人口は 4,022 人となっている。以上のように、1920 年代から敗戦まで、端島の人口は、坑夫とその家族を中心に 3,300 人前後を維持していたと思われる。坑夫数対してその家族数は少なく、坑夫の多くは独身者であった[*13]。

図 2. 端島坑の出炭量と島内人口の推移



資料：三菱鉱業セメント株式会社「三菱鎔業社史」「高島炭礦史」、建築学会論文「軍艦島の生活環境(その2)」長崎造船大学(現 長崎総合科学大学) 片寄俊秀教授

出所：長崎市文化観光総務課・長崎市さるく観光課発行パンフレット「軍艦島」

島の人口は、戦後直後(1946 年)2,743 人に減少しているが、47 年には戦前水準を超える 3,815 人に回復、以後増加が続き、60 年に 1,600 世帯、5,267 人と同島最大の人口となった。その後、世帯数、人口とも徐々に減少していき、長崎新聞によると、62 年は 4,992 人(鉱員 1,309 人，その家族 3564 人)であった[*14]。64 年 9 月のガス爆発後の操業低下で従業員が 1,056 人から 524 人に半減したこともあって、砿員・職員家族、下請業者その他を含めて約 2,000 人が転出、65 年には人口は 734 世帯、3,068 人となった。その後、生産の増加があって、島人口は再び増加傾向となり、68 年に 934 世帯 3,780 人まで回復した。しかし、再び減少傾向となり、翌年の 69 年 10 月 1 日の砿員数は 674 名、職員数は 87 名で、70 年 3 月末日の人口は 2897 人である。閉

山が提案される直前の 73 年 3 月末には 617 世帯 2,426 人となっている。そして閉山後の 74 年 3 月 31 日には 74 世帯 363 人となり、4 月 20 日、端島発の最後の高島－端島航路定期船が出て、端島は無人島となった。

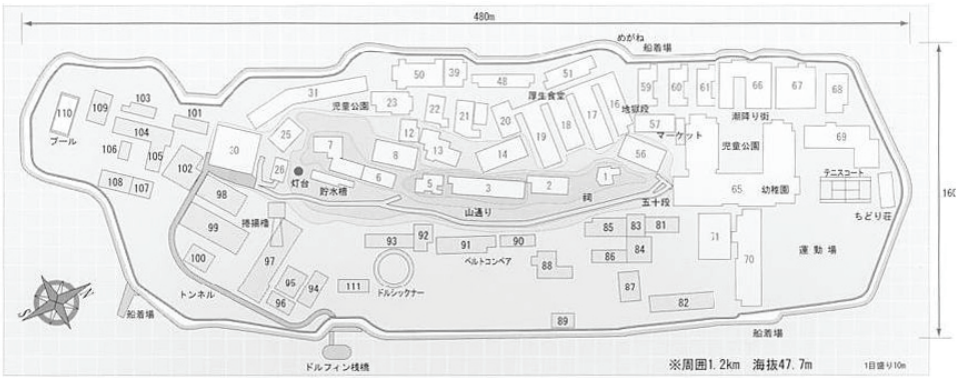
住宅施設等(図 3) *15

高島炭鉱・端島支坑を経営する三菱鉱業は、24 時間 2 交代(戦後は 3 交代)で働く坑夫・職員とその家族のための住宅、利便施設等を端島に建設していった。

1889 年に三菱社立尋常小学校の設立(1921 年に町立)、1916 年日本初の 7 階建て鉄筋コンクリートアパート(30 号棟〈図中の建物の番号〉)を建設、続いて 18 年には 3 棟の鉱員アパート(通称「日給社宅」)を建設するなど、45 年までに 15 棟の鉱員社宅、職員社宅、独身寮と職員合宿所(36 年)、「昭和館」〈映画館兼多目的ホール〉(27 年)、泉福寺(21 年)、端島神社(36 年)、島内唯一の旅館「清風荘」(31 年)が建設されている。この他に、教職員寮「ちどり荘」、霊暗所等が建設されている。

戦後も 70 年までに、12 棟の鉱員社宅、職員社宅、独身寮と鉱長社宅(50 年)、下請飯場(66 年)、職員クラブハウス(53 年)、2 棟の病院・隔離病棟(58 年)、2 棟の町営住宅(53 年、67 年)、町立小中学校(58 年)、小中学校体育館(70 年)、町立公民館(64 年)等が建設されている(( )内は建設年)。

図 3. 端島(軍艦島)施設平面配置図



注：図中の番号 1～70 は住居・生活関連施設(2, 3, 5, 6, 1256 は職員社宅、16~20, 30, 31, 48, 56, 57, 59, 60, 61, 65, 67 は鉱員社宅)、82～110 は炭坑施設。ただし、100 はプール、103 は下請住宅

出所：「軍艦島を世界遺産にする会」公式 WEB gunkanjima-wh.com/hasima.htm (原資料「阿久井善孝・他編『軍艦島実測調査資料集』東京電機大学出版局 1984 年)より

面積わずか 6.3ha、しかもその半分以上が作業場・作業施設に取られている狭隘な土地に数千人が居住していたのである。最大の住民(5,267 人)がいた 1960 年の人口密度は、当時の東京

都の人口密度の 9 倍以上という超高密度であった。その狭隘な土地に数千人の居住者用の住居・生活関連施設が建設されたのである。必然的にそれらの大半は中高層の集合住宅形式の建物にならざるを得ない。事実多くは 3 階以上で、5，6 階建てのものが多く、9 階建ても 5 棟、9 階(一部 10 階)建ても 1 棟〈65〉あった。

2. 社宅に見られる階層格差

端島の建物群については、『軍艦島実測調査資料集』に詳細な説明がなされている。これに基づいて、社宅に見られる従業員の身分・階層格差を見てみよう。

端島の炭鉱従業員の社宅には、鉱長社宅、職員社宅、鉱員社宅、独身寮、下請飯場等の種類がある。それらは、建物の位置、居室、風呂等で格差があった。

鉱長社宅〈5〉（1950 年に建設。数字は、図にある建物の棟番号、以下同じ）は、島のほぼ中央の南側、「島内で最も恵まれた稜線上にあり、居住性に優れ、東西の眺望」の「すばらしい」位置に建てられており、島で唯一の塀囲いの木造 2 階建てである。「床の間付き和風客間、マントルピースのある応接間や広いサンルーム等を有する」、狭いながらも植え込みのある庭や玄関前のスペースもある「高級住宅」と説明されている*16。図面を見ると 1 階は 8 畳と 6 畳、比較的広い廊下、縁台、テラス(サンルーム)等が見られる。海底水道開通(57 年)以前に内風呂があった唯一の住戸であった。

職員社宅(棟)は幾つかあるが、その大半は見晴らしの良い島の中央高台に建てられており、部屋の広さも、6・6・4.5 畳(＋台所。以下同じ)の 3K、8・6 畳の 2K、6・6 畳の 2Kのものが見られ、59 年に建設された幹部職員社宅〈3〉には内風呂があった。また、高級職員用のクラブハウス〈7〉がオーシャンビューの高台に建設(53 年)されている。このクラブハウスは、高級職員の集会、宴会、応接、娯楽（ビリヤードや囲碁・将棋等）等に使われたほか、風呂もあり、会社の仕事関係の出張者や来島客の宿泊所の機能を果たしていた。

他方、鉱員社宅の大半は、北西側の低地に立てられている。部屋の広さは、最初の集合住宅である 30 号棟は 4.5 ないし 6 畳＋炊事場という 1Kであるが、それ以外の鉱員社宅は 6・3 畳、6・4.5 畳、6・6 畳＋炊事場という 2Kである。

しかし、多くは防潮壁の役割をなしているため、窓も小さく、高層が密集しているため特に下層は、風通しも悪く、日当たりも良くない。そして、高い暴風雨の時には 7，8mの岸壁を越えて海水が入ってくる。元島民小林要は「海に向かった社宅には、暴風雨の日には海水がたたきつけるように入って来た」と語っている*17。

戦前に島を訪ずれた村松貞子は「7, 8 階からの下の家はどこも薄暗いこと驚くばかりでした。

コンクリートむき出しの天井はなんだか湿っているようです。……、あまり建物が高いのでそれに遮られて日光の届かない家が多いのです。」「坑夫たちの住む島の下の方に行ってみました。職員の社宅とちがって電灯も暗く、水がたまったり紙屑が落ちていたりしている。」「島の上の家々は風が通って涼しいのに、下の坑夫のアパートや合宿は狭苦しくてちっとも風が通らないらしく、昼間の激しい労働に疲れた人々はただ安眠を求めるために外に出てくるのです。」「呼吸器病の発生率が高く、トラホームにかかっている子供、近視が多く、とにかく、一体に島の人々の健康は優れないらしく、顔色もよくありません」と記している*18。F．エンゲルスの『イギリスの労働者階級の状態』の記述を想起させられる。

戦後も同様、高層住宅が密集しているので日照条件は極めて悪い。島の西北側に並ぶ5棟のうち4棟〈60，61，66，67〉の6階から下は「日光が全く差さない」昼なお暗い住居である*19。

下請社宅(飯場)の一つ(最初の 7 階建て集合住宅〈30〉)は、鉱員社宅が後に転用されたもので、一戸ごとに炊事場があったが4畳半ないし6畳一間である*20。もう一つは、プレハブ2階建〈26〉である。ともに島の北西の端の方、会社事務所の裏の立地している。なお、図上には、西端にもう1棟「下請住宅」(〈103〉社宅ではない)の存在が記録されている。

住宅の位置・広さのみならず、風呂事情にも格差があった。海底水道が開通(57 年 10 月)する以前から内風呂があったのは、鉱長宅とクラブハウスのみで、他は共同浴場であった。それも職員家族浴場と労務者(鉱夫)浴場に分かれていた。共同浴場は、54 年時点で、職員家族用 1、労務者(鉱夫)2 である。65 年の台風で労務者用共同浴場が使用不能になって、鉱夫にも職員家族用を利用させることになってこの差別は一応解消した。閉山前には、幹部職員社宅である 3 号棟にも各戸に風呂がついた。また、共同浴場は4ヶ所になっていた*21。しかし、高級職員及びその家族は共同浴場にゆかず、クラブハウスの風呂を利用していた。なお、一般人（例えば、行商人等）は旅館清風荘（31 年建築）に宿泊していた*22。

以上のように、社宅は内風呂付の鉱長社宅、高級職員用の社宅(後に各戸に内風呂)、職員社宅が島中央の日当たり・見晴らしのよい高台に建てられていたのに対し、鉱員社宅は島北西海寄りの低地に防潮機能を持たせて建設され、低層階は日当たりが悪かった。ただ、各戸とも 2 間以上で炊事場は付いていた。またトイレは各棟・各階段に共同便所が設置されていた(50 年以降に建設された比較的新しい棟は水洗になっていた)。また、下請には鉱夫社宅から転用された古い・狭い建物〈30〉やプレハブ住宅があてがわれていた。

このように、鉱長、幹部職員、職員、鉱夫、下請という職階・身分によって、住宅の位置・広さ、風呂に見られるように、目に見える格差がつけられていたのである。

この社宅の割り当ては、戦前は「一切会社側の管理の下にあって部屋の決定も鉱夫たちには自由に選択出来ず、労務係が平常の仕事の成績に従ってよい部屋をあたえる」のであった*23。

戦後労働組合の要求もあって、47 年に「社宅入舎割当点数制(住み替えの点数制度)」が実施され、勤務成績、勤続年数や家族構成(職員の場合には給与ランクが加味される)に応じて希望の部屋が選べるようになった*[24]。閉山時は 65 号棟 7 階に住んでいた小林は閉山までに「太陽の光が当たる部屋を求めて」4 回移転した。「若いころは、真っ暗な階。勤務成績や勤続年数に応じて日当たりが良い部屋が選べるようになりました。」*[25] とはいえ、職員と鉱夫の社宅は最後まで厳然と区別されていたと思われる。

軍艦島の建造物を調査した阿久井は以下のように記している。「島民の住空間は、職階制によって、職員、鉱員(鉱夫の戦後の呼称)、下請労働者、商人(会社から住居と店舗を賃借していた)と、それぞれ明確に使い分けられていた。公務員(教職員や役場職員や公共施設の職員等)は、職員と同等に扱われている。さらにその下には慰安婦、戦争中に強制的に連行されてきた朝鮮人や中国人が劣悪な環境に詰め込まれていた。

各階層の中にはそれぞれさらに細かく階層の区分があり、その中でも坑外夫(保安仮設<ママ-柴田>)と坑内夫(採炭夫)の間には大きな差別があった。居住区画は地域ごとに、あるいは同じ建物でも上の方から階層別に一級～四級とランク付けられており、建物の質的居住性だけでなく、人間環境も含めて住空間のレベル差が、島民の階層と表裏一体となっていた」としている。つまり、端島炭坑の社宅は「身分職階別に立体的ゾーニング」されていた*[26]。

なお、皮肉なことに、70 年以降の炭鉱従業員の減少は、特に 74 年のリストラ後は、空いた戸をつないで二戸を 1 家族で使ったり、より広い、より住み心地のよい棟、上層階に移れるなど、住宅事情の改善になっていた*[27]。

3.「思い出」の中の住民生活－共同体・古里－

端島炭坑の労働は、戦前は 1 日 12 時間(34 年の「坑内労働時間制限令」撤廃で坑内勤務時間は 12～15 時間となる*[28])を超える 2 交代制の、狭い海底切羽で炭塵にまみれての掘削という重労働であった。戦後は 3 交代制になり、機械化が進んだとはいえ、炭坑夫の労働が重労働であったことには変わりはない。しかも落盤、ガス突出等の、命にかかわる危険に常にさらされての労働である(事実、端島では戦前戦中だけでなく戦後も何度もガス突出・ガス爆発、落盤事故があり何人もの労働者が命を失っている)*[29]。つまり、鉱夫の労働は命の危険と隣り合わせの重労働であったのである。閉山まで 7 年間端島で働いていた片岡は「作業場は海底 600 メートル。坑内にガスの充満して電球の光がにじんでくっとです。きつかったあ。しかし若かったけん」と語っている*[30]。

端島は石炭の島であると同時に、そこには人々の暮らし・営みが続いてきていた。

島の生活は三菱支配のもと、2 で述べたように、職員と坑夫、下請というように職階が反映した階層化された生活環境にあった。ただ、子供達はこの格差を実感していなかったようである。子供時代を端島で暮らした坂本は、「閉山後各部屋を見て身分社会を実感した」と述懐している*[31]。

小さな炭鉱だけの島である端島には生活に必要なあらゆる施設が揃っていた。記録から端島にあった生活関連施設を列挙してみよう。公共機関としては、役場支所、警官派出所、小中学校、保育園、病院・隔離病棟があり、寺社、霊暗所もあった。生協・購買会、複数の個人商店、理容・美容室、旅館、映画館、スナック、パチンコホール、麻雀店があり、そして酌婦のいる娼家まであったのである。無いのは火葬場と墓地だけと言えるほどであった(火葬場と墓地は中ノ島に置かれていた)。しかも病院・隔離病棟、学校など単独で成立している施設を除いて、娼家も含めてあらゆる機関・施設が鉱員社宅の建物に組み込まれていた(社用以外の行商人等が利用した旅館とその階下のスナックは職員社宅に併設)。

つまり、島は密集したひとつの生活空間として完結していた。島の人は大人も子供も、1 日 24 時間、1 年 365 日この小さな島内で生活していたのである。「アパートは 6 畳 2 間に炊事場。嫁さんと長女の 3 人だから広くはなかった。ただ飲み屋から何から、すべて近うて住みやすかったね」*[32]。電気、水道は会社の補助で好きなだけ使い(「家賃、水道、電機、風呂すべて合わせて 10 円」だった*[33])、最新式の電器製品を買いそろえた当時の生活は、「特別生活に困るものもなかった。時化の日のラーメン生活ぐらいでしょうか……」*[34]。島では、58 年には電化製品(電気釜、電機洗濯機、冷蔵庫、テレビ)が入り、東京より高い普及率(ほぼ 100%)で「豊かさ」と「便利さ」とがあった。そして、そこには「隣近所に負けまい、という妙な競争層意識がありました。隣が買えば、ウチも買う。隣が 12 インチテレビなら、ウチは 14 インチを買う」*[35]。

そして、共同浴場、当時の公団住宅の 2〜3 倍の巾があった廊下や階段の踊り場などは井戸端会議や夕涼み、幼児の遊び場であり、大人たちが子供たちをしつける場であった。「共有空間は、コミュニティの連帯感を育て、教育の場ともなっていた」。*[36]

また、会社は年賀式、山神祭、盆行事(合同慰霊祭、盆踊り、花火大会、運動会等)等の行事を催し*[37]、労働組合も、歩け歩け大会、ミカン狩り、演芸大会、納涼大会等の島民共同の娯楽を提供していた。島民も棟の屋上に大人も子供も一緒になって菜園(ナス、トマト、キュウリ等)を作り、収穫祭りを行い、2.5 ㎡の水田、花壇、温室、野球場、弓道場も造り子供の遊び場とした。「子供たちは、限られたスペースでいろいろ工夫して遊んだね、本当に楽しかった」*[38]。「娯楽も限られた島民たちは全員のまつりでした。……どんなイベントでも島民みんなが協力し合った」*[39]。

そこではプライバシーなどほとんどないような濃密な隣組的な近所付き合いが展開されてい

たのである。しかし、「それなりのルールが暗黙の中で存在し老若男女の人々が家族ぐるみの生活を営んでいた」*40。

このような、プライバシーも無い、濃密な家族ぐるみの生活は、一つの企業・同一職業の集団の中での、生活圏の小ささ・密度の濃さ(住居が密接、人々の生活は島の中で完結)であったゆえに可能であったと言ってよい。

この島に住み・働いた人々は、閉山後に「端島会」を発足させ、81 年には「全国端島会」を設立、「閉山 10 周年記念式典」(参加者約 330 名)を開き、以後、「20 年の集い」(同約 360 名)、「25 周年祝賀会」(同 230 名)、「30 年の集い」(同 217 名、03 年 1 月)と節目ごとに集まりを開き*41、閉山・離島で散りぢりになりながらも、繋がりを持ち続けてきた。本年(2010 年)1 月に「端島小中学校同窓会」も発足させている*42。

そして、それらを通して、端島の生活は、人々の「思い出」の中で「懐かしい」「楽しかった」生活として純化されてきている。端島はそこで働いた人、育った人のハイマートとなったのである。

「つらい体験や、思い返したくない記憶があったはずでした。それは歳月とともに島の暮らしを懐かしむ気持ちに変わってきました。」「島全体が、ひとつの家族のようでした。」*43「夕食時になると、近所の人がいつもおかずを持ってきてくれた。……私の育ての親は軍艦島とそこに住む人たち。島が丸ごと家族でした。」*44

「私が端島で生まれて育った思い出は、とても暖かくて楽しいことばかり。……『心のふるさと』として端島のことを愛していることは、みな同じなのだと感じました。今は消えてしまった町だけど、暮らしの中には現代において、欠けている隣人愛や人情がたくさんありました。端島に住んでいた人たちは、大きな船の乗組員のように、今でも心の絆はしっかりとつながっています。」*45

というように、島で労働、生活をした人にとって、島を離れて 30 年を経った今は(でも)、端島は「懐かしい、暖かい」「故郷」として、心の中で生きている。それは、島では、「隣人愛や人情」のある「島中が家族」のような生活、一つの「共同体」であったことに因るだろう。

4.「恨み」の地獄島－朝鮮人労務者にとっての端島－

このように、かつての住民に楽しい・懐かしい「思い出」の故郷として純化されてきた「端島」であるが、他方には、「忘れよう、思い出さずにいよう」とされ、語られることが少ない「負の遺産」がある。それは未だ三菱資本と日本国からの謝罪・賠償のされていない「地獄島」「監獄島」としての端島での朝鮮人・中国人労働者、なかでも強制連行されてきた労働者たちの労

働と生活である。

端島炭坑に朝鮮人が強制連行されてきたのは、1939年であった。しかし、それ以前から中国人、朝鮮人労働者は働いていた。端島の年表を見ると、「朝鮮人坑夫と日本人坑夫乱闘」、(1919年)、「朝鮮人落盤で死亡」(24年)、「高島とともに、鮮人坑夫350余人との間に懇親会計画」(35年)、「とばくで朝鮮人12名逮捕」(38年)等の記録が散見される。前述の村松のレポート(36年)には「朝鮮人労働者が130人も住んでいました」と記されている。また、炭鉱労働者だけでなく朝鮮人「酌婦」もいた(「37年6月に酌婦とされた朝鮮人女性がリゾール〈クレゾール〉を飲んで自殺」との報告がある[*46])。

「三菱高島炭鉱に朝鮮人労働者が集団的に『募集』されたのは1917年」[*47]とされている。18年5月には、高島炭鉱の朝鮮人労働者は334人で、うち端島坑に70人いた[*48]。

そして39年「朝鮮人労働者が坑内夫として集団移住開始」[*49]された。しかし、その正確な人数、労働実態等は明らかになっていない。後で述べる「長崎朝鮮人の人権を守る会」の調査によると、43年には端島に「強制連行された朝鮮人約500人、中国人約240人が働いていた」[*50]。

『高島炭礦史』で確認できるのは、敗戦後の「当面の復旧状況、資金繰り、食糧事情等の見通しが楽観でない状況から、従業員を大幅に縮減」する「一方、治安上、外国人労務者を早期に帰還させることが急務と判断」して(日本人の)新規徴用者、工場転換者全員(計363人)を8月中に、朝鮮人労務者は輸送の関係から逐次送り出し、10月末までに帰還させた。中国人労務者11月19日に……退島し」と記されている。45年8月に、高島砿業所(二子坑、端島坑)に、4,186人の労務者がいたが11月末には1,759人で、2,427人の減少とされている[*51]。つまり、日本人の新規徴用者、工場転換者363人を除くと、二子坑、端島坑合わせて2,064人の中国人、朝鮮人労働者がいたことになる。端島坑は1,600人から594人と1,006人の減少となっているので、その中に日本人の新規徴用者、工場転換者がいたとしても、1,000人近くの中国人、朝鮮人労働者がいたことになる(中国人、朝鮮人のそれぞれの数は不明。ただ、中国人より朝鮮人が多かったのは間違いないであろう)。

さて、彼らのおかれていた現実はどうであったのであろうか。

「一に高島、二に端島、三で崎戸の鬼ヶ島」、「端島の桟橋に残る石造りの門は一生出られない“地獄門”と言われ、崎戸島は“鬼ヶ島”、高島は“白骨島”と呼ばれて脱出不可能の孤島の炭鉱」[*52]として恐れられていた端島坑における労働者の実態については、語られはしてもその全容を示す正確な記録・証拠は見つかっていない。

彼らの居住環境は日本人坑夫以上に劣悪であった。「屋上から見ると他に底のような1階、しかも1階といってもすこし段々を下りた半分地下室のようなところには、お風呂場や物置と隣り合って、朝鮮人労働者が130人も住んでいました」[*53]と報告されているように、強制連行さ

れる以前から、朝鮮人労働者は、より条件の悪い住居に押し込められていた。

強制連行されてきた朝鮮人労働者には、日給社宅の1階部分が飯場として割り当てられていた。「その詳細は不明であるが、旧島民よりの聞き込みによれば、ゆっくり手足を伸ばせぬほど人間が詰め込まれ、夏期の高温・高湿に耐えきれず、多くは大廊下などの外部にはみ出して寝起きした、という」[*54]。

強制連行されて端島で強制労働に従事させられた除正雨は、「私たち朝鮮人は、この角の、二階建てと四階建ての建物に入れられました。一人一畳にも満たない狭い部屋に7, 8人いっしょでした」と証言している[*55]。

また、中国人労働者も「20人が狭い部屋に入れられ寝返りもできない状態で眠り、食事は小さなまんじゅうやおかゆ」「監督者からなんども『ばかたれ、ばかやろう』とののしられた」と証言している[*56]。そして、彼らを待っていたのは、重労働と粗末な食事とリンチであった。

高島・端島炭坑では、戦後3交代制が導入されるまで、「仕事は2交代制、1日12時間以上、採炭の現場(切羽)への往復時間を入れると十数時間も拘束される極限的な重労働であった。」[*57]

14歳で徴用された徐は、証言を続ける。「糠米袋のような服を与えられ、到着の翌日から働かされました。」「エレベータで竪坑を地中深くおり、掘削場となると、うつぶせで掘るしかない狭さで、暑くて、苦しくて、疲労のあまり眠くなり、ガスも溜まりますし、落盤の危険もあるしで、このままでは生きて帰れないと思いました。」「こんな重労働に、食事は豆カス 80%、玄米 20%の飯と、鰯を丸炊きにして潰したものがおかずだった。毎日のように下痢をして、激しく衰弱しました。それでも仕事を休もうものなら、監督が管理事務所に連れて行って、リンチを受けました。どんなにきつくても『はい、働きに行きます』というまで殴られました」[*58]。

このような過酷な状態の中、で日本人労働者より高い割合で、多くの朝鮮人労働者が死亡している。その実態の一端を明らかにしたのは「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」(岡正治代表)が、高島町役場端島支所の廃墟で86年に発見した、1925年から45年までの「死亡診断書」と「火葬認許証」だった。

それによれば、敗戦までの20年間に、端島で死亡した連行中国・朝鮮人は計137人(朝鮮人122人、中国人15人)。朝鮮人強制連行が始まった39年から45年までの6年間では67人(「変死」9人、「事故死」17人、病死23人、埋没による窒息死14人、溺死4人)もおり、特に44年と翌年の45年になると、日本人に比較して朝鮮人の死亡率が高くなっている。朝鮮人は43年の9人から、44年23人、翌45年には8ヶ月で19人死亡している[*59]。なお、徐正雨の証言によれば、「自殺したものや、高浜に泳いで逃げようとして、おぼれ死んだ者が4、50人」[*60]いるという。

このような中国人、朝鮮人労働者が過酷な状態におかれていたことは、当時端島で働いてい

た日本人労働者にも記憶されている。村上由紀子(神村小雪)は「爺ちゃんの話し」として次のように記している。

「『あのころは、本当にかわいそかったー。』戦時中の強制労働の話をしだしたのである。

着るものは上は裸で下だけ一枚の長時間の重労働。食べ物も、ろくなものしか与えられず量も少ない。アパートの下の方で日にも当たれず雑居生活。時々人の目を盗んで、にぎりめしとか持っていってやったけど、そう頻繁に自分とこの部下にだけ良くしてやるわけにはいかなかった。

朝鮮人を一番いじめていたのは実は同じ朝鮮人のリーダーだった。日本人に気にいられようと、これでもかというくらいイジメていた。それを知っていたのか、いないのか、対処できなかった日本人にも責任がある。

それから爺ちゃんがそのことを口にすることは一切なくなった。」*61

また､端島で案内役をしている葛西よう子は｢端島では中国や朝鮮の人たちが強制連行され、過酷な労働で亡くなった。原爆投下後、長崎市内に送り込まれて遺体などの後片付けをさせられ、入市被爆した」と語っている*62。

しかし、三菱はこの事実を認めようとしない。戦後直後の対応については、すでに見たように『高島炭礦史』に、「朝鮮人労務者は輸送の関係から逐次送り出し、全員(45 年)10 月末までに全員を帰還させた。」「中国人労務者(は)、(45 年)11 月 19 日に退島し、佐世保港より……帰国の途についた。」と記しているだけである*63。

91 年、韓国で結成された「端島韓国人犠牲者遺族会」が三菱に「遺骨の返還」を求めたのに対して三菱は「死亡者名簿・遺骨の所在は不明」「事実関係が明らかにされておらず当社の責任について言及することはできません」と回答*64。さらに 01 年「長崎在日朝鮮人の人権を守る会」が端島の所有企業・三菱マテリアルに「強制連行者の名簿公開」を求めたが、回答は「確認できない」だった*65。

中国人労働者の遺族も 03 年日本国と炭坑を経営した会社を相手取り「損害賠償」を求めて提訴した。裁判では 1，2 審とも、強制連行・強制労働への国や企業などの関与を認め、「不法行為」と判断したが、民法上の「時効」に当たる「除斥期間」の経過などを理由に敗訴となり、08 年 10 月最高裁に上告している*66。

三菱資本も国も、端島の、というより、強制連行・強制労働という「負の遺産」を直視せず、朝鮮人・中国人への謝罪と賠償を未だ拒否しているのである。

終わりに

端島は、今、そこでかつて働いていた労働者やその家族にとって、「懐かしい、楽しい端島」として「思い出」の中で生きている。そして「廃墟」「産業遺産」ということで軍艦島として観光ブームとなっている。上陸解禁後 1 年間で島への上陸者は長崎市の予想を大きく超えて59,000 人にもなっている。また、坂本たちの努力の結果「九州・山口の近代化産業遺産群」の構成資産の一つとして「世界遺産暫定リスト」に入った。

しかし、強制就労させられていた中国・朝鮮人「労務者」たちにとっては「監獄島」「地獄島」であった。その「恨み」の部分を日本国も三菱資本も清算しようとしていない。

「長崎在日朝鮮人の人権を考える会」代表であった岡正治は「島の建物、1 木 1 草に至るまでが、今も日本のアジア侵略に対し『沈黙の抗議』を続けているんだ」と端島を位置づける*67。また、長崎総合科学大学教授・横手一彦は、端島について、「グロテスクと見るべきです。小さな岩礁に非人間的な居住空間を作ってまで企業は利益を上げてきた。ここまでして、人間とは自らの欲望を成し遂げようとするものだ、と受け取る方が正確なのかもしれません」という*68。

そして、「世界遺産」を推進する人たちは、この点については「判断」しようとしない。もちろん、「軍艦島を世界遺産にする会」は強制連行の事実は否定していない。しかしその公式 WEB は「端島での強制労働について」で解説してはいるが、「ここでは、端島の歴史の一つとして強制労働に触れ事実の一端をお伝えするのにとどめます」*69 として、判断を保留している。そして、同公式 WEB に掲げてある年表の 1939 年には「朝鮮人労務者が坑内夫として集団移住を開始」とだけ記載している。

軍艦島の「観光」・「世界遺産登録」を推進する人々のこのような姿勢の背後に三菱資本の「影」を感じざるを得ない。三菱重工長崎造船所の従業員(5913 人 09 年 3 月末現在)は市内製造業従業者の 1／3 強、長崎県内製造業従業者の 1 割弱を占め、その年間生産高(4,200 億円)は市内製造品出荷額の 7 割強、県内のそれの 3 割弱を占めているのである*70。加えて長崎地区に 16 社の関連企業、多くの協力会社が存在している。他に、三菱電機(株)、東芝三菱電機産業システム(株)が存在し、製造業でみるならば、長崎市は三菱資本の城下町と言っても過言ではない。

その三菱資本は、すでに見たように、端島抗を含む高島炭鉱は、「三菱全体の飛躍の源泉になったばかりでなく、ひいては近代日本産業の発展に大きく貢献した」と誇る一方、朝鮮人・中国人労働者については、その数も労働実態も、死者の数も「確認できない」、「死亡者名簿・遺骨の所在は不明」「事実関係が明らかにされておらず当社の責任について言及することはできません」と責任逃れの回答をしているのである。三菱長崎造船所もかつて強制徴用の朝鮮人・中国人労働者を受け入れ、働かせてきた事業所である。端島の、高島の強制労働の実態を認めるこ

とは、長崎造船所、ひいては全三菱企業に影響を及ぼすことになるのは想像に難くない。

企業利益のために、「非人間的な居住空間」を作り、日本人炭坑労働者のみならず、朝鮮人・中国人を強制連行し、過酷な労働を強いられた端島炭坑の史実に正対をしないで、産業遺産としての建造物にのみ焦点を当てた「世界遺産」は歴史の冒涜というべきであろう。

それでは、観光客への正しい説明もできないのではないだろうか。

事実、ガイドのＢ氏は「一番今ガイドをしていて怖いのは、強制連行のことを聞かれたらどうしようということなんですね。統一したものがないんですよ。それ（議論）はあるんだけど、じゃあどうしたらいいのかっていうような方向性っていうのは今まだ気持ちの中で決められてないんですよ、……不用意に発言できないんですよね」*71と言う。「はじめに」で述べた、Ａ氏の苦しそうな発言にも、そのことは表れている。

「正の歴史にしても負の歴史にしても、現在の軍艦島は人の営みによって生まれた」*72ことは事実である。しかし、「負の歴史」だけを忘却することは出来ない。「負の遺産」をも正しく総括することこそが、軍艦島を「観光資源」・「世界遺産」たらしめることになるのではないだろうか。

注

*1　本稿では、「端島」と「軍艦島」を適宜使う。行政区域としては「端島」（長崎県西彼杵郡高島町端島、2005 年の町村合併によって長崎市高島町字端島）、また旧住民にとっても「端島」であり、炭鉱・廃鉱・観光の島として「外から見るとき・見られるとき」は「軍艦島」であるようだ。元住民・「軍艦島を世界遺産にする会」代表の坂本道徳は「私にとっては、ここは“廃墟”の『軍艦島』ではなくて、故郷の『端島』」と言っている(『西日本新聞』連載「世紀末……脚光を浴びる『軍艦島』　何かを求めて～世紀末の軍艦島で～」2001 年 12 月)。
http://www.nishinippon.co.jp/nnp/culture/heritaging/nagasaki/gunkanjima/2001/01.shtml

*2　阿久井喜孝、滋賀秀実編著『軍艦島実測資料集－大正・昭和初期の近代建築群の実証的研究－』1984 年　東京電機大学出版会

*3　2003 年、「軍艦島を世界遺産にする会」(代表　坂本道徳)が発足し、運動が開始される。09 年「九州・山口の近代化産業遺跡群」の一つとして暫定登録された。

*4　2010 年 4 月 23 日『読売新聞』

*5　後藤惠之輔・坂本道徳　『軍艦島の遺産：風化する近代日本の象徴』 長崎新聞社、2005 年

*6　三菱石炭鉱業(株)『高島炭礦史』1989 年

*7　閉山式での端島労組委員長の発言

*8　閉山式での社長の挨拶。前掲『高島炭鑛史』

*9　「端島詳細年表」(gunkanjima-wh.com/unadata/nenpyou)、

*10　本節の人口、世帯、就業者数等については、特に注記したもの以外は、『高島炭礦史』、軍艦島を世界遺産にする会 WEB「端島総合年表」、「端島詳細年表」(gunkanjima-wh.com/unadata/nenpyou)、「想像と

記憶(端島・軍艦島)」(http://www1.cncm.ne.jp/~hasima/ bunkazinkou.html)のデータに基づく。

*11 「九州各地の炭坑」三菱鉱業(株)高島砿業所端島坑の項(http://record.museam.kyushu-u.ac.jp/sekitan/etc1 原典『石炭時報』第 1 巻第 1 号(1926 年)

*12 村松貞子「全島面積 1 万 5 千坪・人口密度日本一の端島を訪う」(前掲『軍艦島実測資料集』p.683。原掲載誌『婦人の友』1936 年 10 月号 婦人之友社)

*13 上掲、村松 p.683

*14 『長崎新聞』

*15 本節の住宅等施設のデータは、前掲 阿久井喜孝、滋賀秀実編著『軍艦島実測資料集』による

*16 同上 p.668

*17 『西日本新聞』1983.8 連載 6

*18 前掲、村松 p.684-6

*19 『西日本新聞』1983.8 連載 6

*20 前川雅夫『炭坑誌－長崎県歴史年表』p.231、葦書房、1990 年

*21 前掲『軍艦島実測資料集』p.616 なお、原文は「44 箇所」となっているが、4 箇所の誤記と思われる。

*22 同上 p.668

*23 前掲、村松 p.686

*24 前掲『軍艦島実測資料集』P.650 注 8

*25 『西日本新聞』1983.8 連載 8。

*26 前掲『軍艦島実測資料集』p.636

*27 O Project Presets「GUNKANJIMA ODYSSEY ABUT GUNKANJIMA」gunkanjima-odyssey.com

*28 前掲、「端島総合年表」

*29 前掲「端島詳細年表」に、度々のガス爆発、自然発火等、そしてそれらによる死亡者数の記述がみられる。

*30 「風‘94 長崎～たたずむ『時代の証人』～」『西日本新聞』95 年 1 月

*31 坂本道徳「軍艦島への想い」(軍艦島を世界遺産にする会 WEB『さまざまな軍艦島』)

*32 「風‘94 長崎～たたずむ『時代の証人』～」『西日本新聞』95 年 1 月

*33 前掲 「ABOUT GUNKAJIMA」

*34 前掲、坂本「軍艦島への想い」

*35 『西日本新聞」2001 年 12 月 連載 2

*36 前掲、『西日本新聞』1983.8 連載 5

*37 前掲、坂本「軍艦島への想い」

*37 『高島炭鑛史』p.418、

*38 読売新聞「よみがえる軍艦島」09.1.4 http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/nagasaki/feature/nagasaki

*39 『西日本新聞』98.3.8 連載 7

*40 前掲、坂本「軍艦島への想い」

*41 前掲、「端島総合年表」、『軍艦島グラフティ』の著者村上由紀子(神村小雪)のブログ「端島っ子クラブ」「年表」http://www.little-snow.com/hasima/minasane.html

*42 『読売新聞』10.1.12 kyushu.yomiuri.co.jp/local/nagasaki)。

*43 『西日本新聞』83.8 連載 11

*44 「朽ちてなお」連載 1『西日本新聞』200.3.7

*45 神村小雪ブログ「端島っ子クラブ」 「心の宝島」
*46 在日朝鮮人の人権を守る会『原爆と朝鮮人』4p.76
*47 『筑豊石炭礦業史年報』
*48 前掲、前川『炭鉱誌』p.231
*49 前掲「端島年表」
*50 「世紀末…脚光を浴びる『軍艦島』」4『西日本新聞』01 年 12 月 http://www.nishinippon.co.jp/cultur/heritaging/nagasaki/gunkahjima/2001/04.shtml
*51 『高島炭坑史』p.314-315
*52 「軍艦島を世界遺産にする会」公式 WEB「端島の強制労働について」
*53 前掲、村松 p.686
*54 前掲、『軍艦島実測資料集』p.647
*55 http://www.d3.dion.ne.jp/~okakinen
*56 前掲、「よみがえる軍艦島<5>強制連行の歴史を伝えて」『読売新聞』企画・連載 09.1.7
*57 前掲、『軍艦島実測資料集』 p.636.
*58 前掲 http://www.d3.dion.ne.jp/~okakinen
*59 その経過や聞き取り調査の内容は、林えいだい『死者への手紙－海底炭鉱の朝鮮人坑夫たち』」明石書店」で明らかにされている。
*60 前掲『西日本新聞』1983.8 連載 9
*61 神村ブログ「小雪の小言 4. 爺ちゃんのこぼした話」。誌面の都合上行替えを変更させていただいた。
*62 2006 年 8 月 9 日『長崎新聞』
*63 『高島炭鑛史』p.316-7
*64 前掲、『原爆と朝鮮人』6・p.228、
*65 「世紀末…脚光を浴びる『軍艦島』」連載 4『西日本新聞』 01 年 12 月
*66 前掲、『読売新聞』長崎版「よみがえる軍艦島」<5> 2009.01.07
*67 「世紀末…脚光を浴びる『軍艦島』風'94 長～たたずむ『時代の証人』～」連載 1 95 年 1 月
*68 『毎日新聞』「特集ワイド：09 年夏・昭和の町に吹く風は 長崎・軍艦島」2000.08.28 http://www.mainichi.jp
*69 軍艦島を世界遺産にする会 WEB 「端島の強制労働について」 http://www.gunkanjima-wh.com/unadata/gaisetu9.htm
*70 「長崎造船所の概要」(三菱重工ＨＰ)、長崎造船所長「三菱重工長崎造船所の事業活動について」(『長崎経済』2009 年 12 月号)、「工業統計」より
*71 木村至聖「産業遺産の表象と地域社会の変容」(『社会学評論』239<Vol.60.No3.>09 年 12 月 p.426)
*72 坂本道徳『長崎新聞』2009.10.24